

## 沼 遺 跡 (ぬま いせき)

沼遺跡は、尾根上に位置する弥生時代中期から後期前半の集落遺跡です。昭和 27 (1952) 年から昭和 33 (1958) 年にかけて、5 次にわたる発掘調査が行われた結果、その全容が明らかになりました。

遺跡は、遺跡中央の道路を挟んで東西に大きく区分され、東地区では掘立柱建物 3 棟と南北方向に走る溝が、西地区では竪穴住居 5 棟、長方形竪穴遺構 1 基、土坑 1 基が確認されました。また、出土遺物としては、弥生土器、石器、鉄器、ガラス小玉が出土しました。

西地区の竪穴住居は、長方形竪穴遺構を取り囲むよう配置されており、長方形竪穴遺構はこの集落の共同作業場と推定されています。また、確認された住居跡のなかには焼失した状態で見つかったものもあり、炭化した木材からは住居の構造を復元する重要な手がかりを得ることができました。

一方、東地区では掘立柱建物のみが配置されていることから、この集落のなかでの空間利用のあり方を示唆しているといえます。

沼遺跡は、ほぼ一つの集落全体が発掘調査されたことから、集落の構造と規模、空間利用の実態が初めて把握され、そして、弥生時代の集団の基礎単位を研究する嚆矢となった学史的に重要な遺跡です。

昭和 30 (1955) 年には現地に竪穴住居が復元され、歴史学習のための史跡公園として整備されました。

その当時、市民が身近に見学できる遺跡は全国的にも珍しく、画期的なできごとでもあり、その意味でも貴重な遺跡といえることができます。

なお、出土遺物は、隣接する津山弥生の里文化財センターで展示されています。



写真上

沼遺跡空撮 (東地区) (南から)

写真下

同 (西地区) (南西から)